

生飯について——衆生への供養——

花園大学 小川太龍

本発表は生飯^{きば}について、その起源説と中国・日本における受容と展開を分析することにより、生飯の意義と変化を論じるものである。

生飯とは、食事に際してその一部を取り分け供物とする、現代でも行われる仏教儀礼である。これまで生飯について、施餓鬼会や水陸会を論じるにあたり言及されることがあった。そして、「施食（食物を布施する）」という共通点から、これら儀礼の境界が曖昧であることが一部指摘されている。また寺院生活研究の側面から、宋代には絵画に残されるほどに一般化した儀礼であることが明らかにされている。

しかし、生飯を主題として取りあげ、その起源や意義などの詳細を論じ、さらに中国と日本における受容と実施状況について総合的に分析されたことはなかった。

そこで本発表では、(1) まず生飯の代表的な起源説を確認しつつ、その目的と意義について見る。(2) そして仏教における施食について、その諸相を確認したのち、(3) 中国・日本両国における生飯の実施について、各種資料から抽出する。

以上により、生飯が施食の一形態として、多様な意義がそこに込められながら、身近な仏教儀礼として今日まで伝えられてきたことを指摘する。これは、仏教における衆生への態度を考えることにつながるだろう。

(1) 生飯とは「出生」「出生飯」「出衆生飯」等と表記されることがあり、その代表的な起源説としては『根本説一切有部毘奈耶雜事』と『大般涅槃經』に見える二つの逸話が挙げられる。これは宋代に広く受容されているが、唐代の資料（『四分律刪繁補闕行事鈔』『南海寄帰内法伝』等）にも見える。そしてその供養の対象は、前述の両逸話や、宋代以降に唱えられる生飯偈からも「鬼神」に主眼を置きつつ広く衆生に向けられることが理解できる。しかし、その目的と意義については別の説も見える。例えば、天台智顛は六道へ向けた、六波羅蜜の実践であると述べるのである（『観心食法』）。

(2) そもそも、食事の際に食物を他に分け与えるべきことは、複数の経論に見える。それらは、ただ諸仏等に供養するとのみ記す（『維摩經』）ものだけではなく、三分割（『大乘義章』）、四分割（『宝雲經』）、五分割（『蘇婆呼童子請問經』）することを述べるものがある。また鳥獸へ食物を分け与えるべきことは、仏典に散見される（『旧雜譬喻經』等）。すなわち、食物の他への分配は生飯という名称でなくとも、行われることなのである。また儒教においても「祭」として食事の一部を供えることが行われていたようであり、宋代には、これと生飯を同一視する例も見えるようになる。

(3) 生飯儀礼は、中国、唐代には広く行われたことが窺われる。そして宋代には、禪宗清規にも規定され、図像資料からもその状況が確認できる。また少なくとも明代から、生飯供養の対象に「金翅鳥」が加えられる例が見えるようになる。一方の日本では、10世紀頃には広く行われていたことが窺える。また日本独自の表記や説話もあり、様々な意味づけがなされながら、宮中をはじめとして一般でも行われたことが各種資料に記されている。

キーワード：出生、施食、鬼神